

『無用の用』

むかしの中ちゆうごく国のこと。

荘そうじ子という人が、山の中を歩あるいていました。

大きな木があり、枝えだや葉はがおいしげつているのを見ました。

木こりが、その木のそばを通りがかりましたが、切るうとはしませんでした。

荘そうじ子はその木こりに、なぜかと質しつもん問もんしました。

すると、木こりはこう言いました。

「使つかい物ものにならないからだよ」と。

あとで荘そうじ子は言いました。

「そうか。この木は、役やくに立たないことで、寿じゆみ命めいをまっとうできるのだな」と。

荘そうじ子は山を下りると、友ともだちの家にとめてもらうことにしました。友ともだちはよるこんで出でむ

かえました。そして召し使いに、

「雁がおつたろう。あれを殺して、料理にお出しなさい」

と言いつけました。すると召し使いはたずねました。

「こちらの一羽はよく鳴きます。こちらの一羽は鳴くことができません。どちらを殺しましょうか」と。

家の主人は言いました。

「そうだな。鳴くことができない方を殺しなさい」と。

次の日。荘子の弟子が、荘子に質問しました。

「昨日、山の中で見た木は、役に立たないから生きのびることができました。この主人の雁は役に立たないから死んでしまいました。先生なら、役に立つのと役に立たないのと、どちらでいたいですか？」と。

荘子は笑ってこう言いました。

「^{わたし}私なら、^{やく}役に立つのと^{やく}役に立たないのとの
^{ちゅうかん}中間でいたいよ。でもそれは^ま真ん中にずっと、
という^い意味ではないよ。それだと^よ世の中の^{なか}トラブルは、
どうしてもたけられないだろうからね。
^{ばん}一番いいのは……^(おんな)」

『莊子』外篇・山木より

(福西／訳)